

令和 4 年 6 月 10 日現在

機関番号：34305

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K18699

研究課題名（和文）視覚情報による人違い現象の解明：人違いの心理学の創生に向けて

研究課題名（英文）Person misidentification through visual information: Toward the psychology of person misidentification

研究代表者

伊東 裕司（Itoh, Yuji）

京都女子大学・発達教育学部・教授

研究者番号：70151545

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,900,000円

研究成果の概要（和文）：日常生活の中で出会った人物を間違えて別の既知人物と判断してしまう「人違い現象」について、日誌法を中心とした質問紙調査、フィールド実験、実験室実験により検討した。質問紙調査では、日常生活での人違いの頻度、状況、対象人物の特性などが明らかになった。フィールド実験では、待ち合わせ場を設定し実験室外の日常的な状況の中で人違いを生起させる実験を行い、3割程度の被験者到人違いを生起させることなどが示された。実験室実験では、人為的に実験室で人違いを生起させる実験パラダイムを開発し、閾下単純接触により未知人物の顔に対する親近性を高めることが、人違いの生起頻度を上昇させることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで心理学では、意図的、意識的に対象の人物に注意を向けて行う人物同定や誤同定についての研究は行われてきたが、われわれが日常経験するような人違いについてはほとんど研究されてこなかった。本研究は、日常的な人違いがどのような現象であるかの概略を示し、可能な研究方法の提案、問題の整理などを行うことができた。人違い研究が心理学の一領域として進められるべきであり、領域として成り立つことを示すことができた。研究の成果は、将来的には目撃供述の信頼性の検討や振り込め詐欺（オレオレ詐欺）の防止にも役立つ可能性があり、この点でも意義が認められる。

研究成果の概要（英文）：The "person misidentification phenomenon," in which people mistakenly judge a person they encounter in their daily lives to be another known person, was examined through diary method questionnaires, field experiments, and laboratory experiments. The questionnaire surveys revealed the frequency and the situation of misidentifications in daily life, and the characteristics of the persons. In the field experiments, we set up a rendezvous scene and tried to have the subjects make misidentifications in everyday situations outside the laboratory, and showed that about 30% of the subjects actually made ones. In the laboratory experiments, an experimental paradigm was developed to artificially generate person misidentifications in the laboratory, and it was shown that increasing familiarity with the faces of unknown persons through subliminal mere exposure increased the frequency of person misidentifications.

研究分野：認知心理学 司法心理学

キーワード：人物誤同定 認知的失敗 人違い 日誌法 実験室実験 フィールド実験 親近性 類似性

1. 研究開始当初の背景

日常生活の中で見かけた人物を別の既知人物と間違える人違い現象は、われわれが日常しばしば経験する現象であり、既知人物を見たという目撃証言の信頼性の問題など応用的にも重要な現象である。しかし従来の人物同定に関する研究は、未知、あるいは既知人物の顔を見て同定を求められた場合の認知プロセスを問題にするものがほとんどであった。このような研究では、通常学習フェイズで見た人物についてテストフェイズにおいて同定判断を求められた状況において意図的に注意を向けて人物を観察し意図的に同定判断を行う。このような研究で対象とする人物の誤同定は、たとえば道ですれ違った際に特に注意を向けずに見かけた人物を誤ってその人物とは異なる既知人物と判断してしまうような人物の誤同定とは異なるものと考えられる。しかし、このような自発的かつ無意図的な同定のプロセスやその際の誤同定についての研究はほとんど行われてこなかった。本研究ではこのような人物誤同定の現象、すなわち「人違い現象」がどのようなものであるのかを示し、人違い現象の解明が心理学における研究の一つのテーマとなりうることを示すことを目指した。

2. 研究の目的

本研究では、人違い現象について、生起頻度、生起しやすい状況、間違いやすい人、間違われやすい人の特性、および生起メカニズムを明らかにすることを目的とする。このため、(1)質問紙調査研究、(2)フィールド実験研究、(3)実験室実験研究の3つの方法を併用して研究を行った。以下に、それぞれの目的を記す。

(1) **質問紙調査** 日常的な状況において人違いはどの程度の頻度で生じるのか、また人違いの生起に影響を与える要因について質問紙調査により検討し、人違い現象の全体像を明らかにすることを目的とした。

(2) **フィールド実験** 待ち合わせ場面を利用したフィールド実験を行うことで、人違い現象の生起確率を明らかにすることを目的とした。また、顔と服装の類似がそれぞれどの程度人違いを誘起するのかについても検討を行った。

(3) **実験室実験** (1)(2)の研究で検討してきた「人違い」の生起に関わる要因を実験的に検討することを目的とした。具体的には、実験室下で人違いを生起させる課題を開発すること、および未知顔への親近感が人違いの生起に寄与するかどうかを検証することであった。未知顔への親近感とは、(1)の調査研究において人違いの生起に関係する可能性が示唆されていた。

3. 研究の方法

(1) **質問紙調査** 461名(調査1:121名、調査2:340名)の被調査者を対象として従来型の質問紙調査と、調査期間の間に人違いを経験することによってできるだけ早くその経験についての回答を求める日誌法による調査を併用した。調査1では、調査までの1年間で経験した人違いの回数と直近の人違いの詳細についての質問に回答し、失敗傾向質問紙にも回答した。またその後2週間にわたり、人違いを経験するたびに、その経験の詳細について回答した。調査2では失敗傾向質問紙に回答し、その後2週間にわたり、調査1と同様に人違い経験について回答した。なお、調査1はコロナ禍以前のほとんどの人がマスクをしておらず行動も制限されていない状況で、調査2は多くの方がマスクを着用して生活し行動も制限された状況で実施した。

(2) **フィールド実験** 61名の大学生が実験1に参加した。心理学の授業内で、受講者にとって未知である男性Xが計2回、1時間程度講義を行った。講義の最後にXが、研究の趣旨を伏せた状態で実験参加者を募集した。応募した学生に、指定の日時に指定の待合せ場所に来て声をかけて欲しい旨を伝えた。後日、Xと同一のスーツを着用しているが顔は似ていないA(服装類似群)、またはXと顔が似ているが普段着を着用したB(顔類似群)が指定の場所で待機した。AまたはBをXと人違いしたか、人違いをして声をかけたかについてデータを収集した。参加者がA/Bに声をかけた時点で、または参加者が声をかけないまま待合せ時刻から10分が経過した時点で、A/Bは参加者とともに実験室に移動し、質問紙への回答を求めた。

実験1では服装と顔の両方が異なる2群のみを比較したため、実験2では両要因の影響を個別に検討した。126名の大学生が実験2に参加した。参加者は、待機している実験者がXと顔が似ており同一のスーツを着用している群(顔類似服装類似群)、Xと顔が似ているが普段着を着用している群(顔類似服装非類似群)、Xと顔は似ていないが同一のスーツを着用している群(顔非類似服装類似群)、Xと顔が似ておらず普段着を着用している群(顔非類似服装非類似群)の4群に振り分けられた。なお、実験1,2共にコロナ禍以前に実施された。

(3) **実験室実験** 非有名人の顔(96枚)と有名人の顔(20枚)を刺激として用いた。実験は

顔への親近感を操作するための閾下单純接触課題と人違いを生起させて測定するための課題で構成された。

閾下单純接触課題 顔への親近感を操作するため、非有名人の顔の半数（48枚）を一枚ずつ、被験者が認識できないほどの短い時間（実験3では16ms、実験4では48ms）提示した。閾下单純接触効果により、この課題で提示された非有名人の顔への親近感が高まると考えられた。

人違い課題 非有名人の顔と有名人の顔をランダムな順番で一枚ずつディスプレイの周辺部分に提示した。被験者は、画面中央に提示される数字を読みつつ、周辺に提示された顔が有名人であるか非有名人であるかを判断することが求められた。もし有名人であると判断した場合、キーボードの特定のキーを押して反応することが求められた。この時、非有名人の顔に対して有名人であると誤判断してしまうことを人違いであると定義し、閾下单純接触課題で親近感を高めた非有名人の顔が人違いされやすいかどうかを調べた。

4. 研究成果

(1) 質問紙調査 以下、質問紙調査の結果の記述では実際に見た人物をA、間違えた知人をXと表す。（Aを見てXだと間違えた。）

① **人違い回数** 調査1の従来型の質問紙の回答では、1年間に経験した人違いの平均回数は5.9回であったが、日誌法の回答から1年あたりの回数を計算すると調査1では18.8回、調査2では14.7回であった。人違いの回数と失敗傾向得点との相関を表1に示す。失敗しがちな人ほど人違いの回数を多く見積もる傾向がみられた（調査1従来型）が、失敗傾向と調査期間中の人違いの回数の間には相関は見られなかった（調査1日誌法および調査2）。

表1 人違い頻度と失敗傾向得点の相関係数（*：p<.05, **：p<.01）

失敗傾向得点	人違いの頻度			
	調査1 従来型	調査1 日誌法	調査2 従来型	調査2 日誌法
アクションスリップ	.31**	.04	.03	
認知の狭小化	.18*	-.10	-.01	
衝動的失敗	.30**	-.01	.09	
人違い傾向	.48**	.04	.10	

実際に見た人物（A） 調査1ではAがよく知っている人物であったとする回答が30%、ある程度知っているが25%、全く知らないが45%程度であった。調査2ではそれぞれ8%、26%、66%と全く知らない人物の割合が多かった。

どんな知人に間違えたか（X） 調査1ではXが何度もあったことがある知人であった割合が80%程度と多数を占めていた。調査2でもXがある程度以上知っている知人であった割合が86%を占め、あまり知らない人物に間違えることはまれであった。人違いをした際にXを探していたことはいずれの調査でも15%前後と多くはなく、Xがその場にいるとは思っていなかったケースが40%から55%程度を占めていた。

AとXの類似度 顔、髪形、体型、服装、動き・仕草（調査2のみ）についてAとXの類似度の評定を求めたところ、体型の類似度が最も高く、顔については最も低く評定した。ただし調査2で人違いの最も大きなきっかけになったものを上記の5つから回答してもらったところ、顔が41%と最も多く、体型がそれに次いだ（24%）。

人違い経験時の状況など ここでは調査2独自の質問項目への回答について述べる。人違いをしたときに実際に見た人物の92%はマスクをしており、62%のケースで人物の顔がよく見えなかったと回答している。一方で人違いに気づいた理由については、その人物をよく見たからという回答が最も多く（62%）、その内の80%が顔をよく見て気づいたと回答している。以上より、人違いが、のちに気づいたものに限っても年に10回前後は経験する現象であり、未知人物、既知人物のどちらを見た場合にも生起し、知人を探している、その場にいることを期待している、などがなくても生起することが示された。また、顔がよく見えない場合に人違いをすることが多いが、顔を見ること人違い生起のきっかけとなり、また顔を見ることで人違いに気づくことが多いこと、実際には実際に見た人物と誤同定された人物の顔はそれほど似てはいないことが示唆された。

(2) フィールド実験 「人違いしたか/人違いをして声をかけたか」に関する参加者の回答を、表2に示す。実験1の結果、「A(B)をXだと思い、声をかけた」率は、服装類似群で.24、顔類似群で.31であった。また、服装類似群で.52、顔類似群で.63の参加者が、少なくとも一瞬は人違いをしていたと報告した。本結果は、待合せ事態において一定程度人違いが生起することを実験的に示したものである。人違いを生動的妥当性の高いフィールド場面で生起させられる実験

表2 群ごとの参加者の回答率（人数）

選択肢	服装類似群	顔類似群
1.A (B) をXだと思い, 声をかけた	.24(7)	.31(10)
2.A (B) をXだと思ったが, 声をかけなかった	.00(0)	.03(1)
3.A (B) をXだと思ったが, よく見ると別人だった	.28(8)	.28(9)
4.A (B) をXだと思わなかった	.41(12)	.34(11)
5.A (B) を見ていなかった	.07(2)	.03(1)

手続きを示したという点において、本研究は一定の成果を得たといえよう。また本結果は、服装といった顔以外の特徴が人違いに一定程度寄与していることを示唆している。人物同定研究は顔のみを扱ったものが比較的多いが、顔以外の特徴についても積極的に検討がなされることが期待される。

次に、「A(B)を初めて見た時（初見時）」「A(B)に話しかけた/話しかけられた時（会話時）」「実験室に到着した時（到着時）」における、参加者のA(B)をXだと思った程度（確信度）を、図1に示す。確信度について時間要因（初見時、会話時、到着時）×類似要因（服装、顔）の2要因分散分析を行った結果、類似要因の有意な主効果が見られた（ $F(1, 59) = 5.59, p = .021$ ）。顔類似群の方が有意に確信度が高かった。時間要因の有意な主効果は見られなかった（ $F(2, 118) = 0.15, p = .858$ ）が、両要因の有意な交互作用が見られた（ $F(2, 118) = 6.27, p = .003$ ）。単純主効果検定の結果、初見時では類似要因の有意な主効果は見られなかったが（ $F(1, 177) = 0.66, p = .417$ ）、会話時と到着時では、顔類似群の確信度は服装類似群より有意に高かった（それぞれ、 $F(1, 177) = 5.57, p = .019, F(1, 177) = 11.59, p < .001$ ）。本結果は、人違いにおいて、初見時には服装は顔と同程度の寄与を果たすが、時間が経過するにつれてその割合が低下していく可能性を示している。このような時間経過によるダイナミズムは、人物同定全般において見られる可能性もあるため、一般的な人物同定過程に関する研究においても時間経過の変数の検討がなされることが期待される。実験2の結果については、現在分析中である。

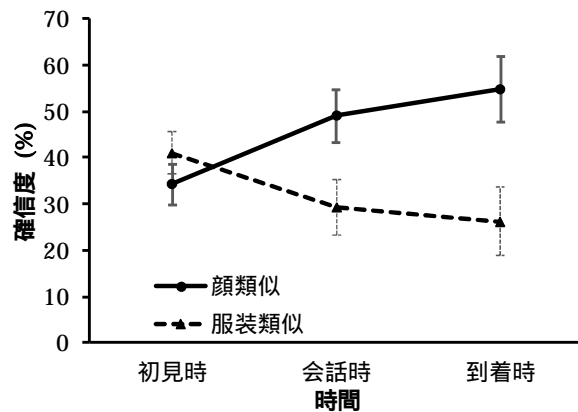


図1 群・時間ごとの確信度

(3) 実験室実験 実験3では、71名の被験者を測定した。実験の結果、閾下単純接触をした非有名人の顔刺激は、していない刺激に比べて人違いされる回数が高かった。しかし、その差をウィルコクソンの符号化順位検定で比較した結果、統計的な有意性は認められなかった（図2: $Z(70) = 1.34, p = .18, r = .16$ ）。この結果には、人違いの生起に顔の親近感が影響しない可能性と親近感の操作が不十分であった可能性の2つの説明が可能であった。そこで実験4では、閾下単純接触で顔を提示する時間を少し長く設定し、親近感がより高まりやすくなるよう操作した。

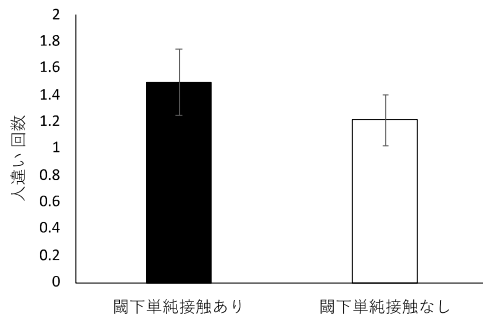


図2 実験3における人違い回数

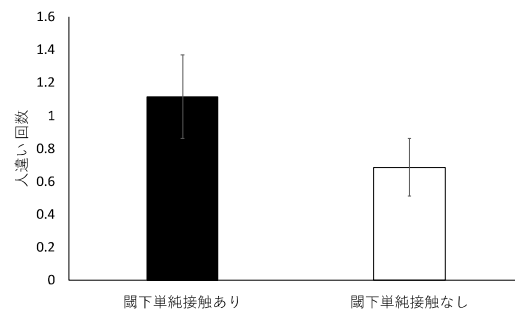


図3 実験4における人違い回数

実験4では、35名の被験者を測定した。実験の結果、闕下単純接触をした非有名人の顔刺激は、していない刺激に比べて人違いされる回数が高く、ウィルコクソンの符号化順位検定の結果、統計的な有意性が認められた(図3: $Z(34) = 2.32$, $p = .02$, $r = .39$)。これらの実験の結果より、人違いの生起に顔の親近感が寄与することが明らかとなった。本研究成果は、これまでほとんど研究されてこなかった「人違い」の生起メカニズムの1つを示すものである。

以上、本研究では質問紙調査、フィールド実験、実験室実験の3種類の方法を用いて人違い現象について検討した。その結果人違い現象は非常にまれなものではなく、日常生活の中で経験する人違いを日誌法による質問紙調査でとらえることが可能であること、フィールド実験、実験室実験で人為的に生起させることも可能であることが示された。このことは人違いという現象が心理学における研究の対象になりうることを示している。また、この現象が事件の目撃者による既知人物を見たとする供述の信頼性の問題などの応用的な問題とかがかわること、人間の認知、特に認知の失敗に関する一般的な議論にとっても有意義な知見をもたらしうることに鑑みると研究を続けていく意義があることは明らかであろう。本研究により人違い研究の可能性が示されたことを受け、今後人違い研究を心理学の一領域として確立させることを目指したい。一方本研究では将来の課題も示されている。いくつかをあげると、質問紙調査では気づいた人違いしかとらえることができず、人違いをして気づかないままのケースがどの程度あり、何が起きているのかをとらえることができない。また、質問紙調査で収集した人違いの事例が、一つの人違いという現象として括れるものであるのか、フィールド実験や実験室実験で生起させた人違いが日常生活で経験する人違いと同じものと考えられるのかについても検討の必要があろう。この領域に参入する心理学研究者が現れることを願っている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Itoh, Y., Shimane, D., & Miura, H.
2. 発表標題 Misidentification of a person as a familiar person: Studies on hito-chigai experiences
3. 学会等名 The 32th International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 伊東裕司
2. 発表標題 「人違いの心理学」を目指して：質問紙調査・日誌法による検討
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 三浦大志
2. 発表標題 「人違いの心理学」を目指して：フィールド実験による検討
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 島根大輔
2. 発表標題 「人違いの心理学」を目指して：人違いを引き起こす要因の実験的検討
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Itoh, Y., Shimane, D., and Miura, H.
2. 発表標題 Misidentification of a person as a familiar person: Is a testimony that an eyewitness saw a familiar person reliable?
3. 学会等名 The thirteenth biennial conference of Society for Applied Research on Memory and Cognition (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 島根大輔・三浦大志・伊東裕司
2. 発表標題 目撃した未知顔への親近感の高さと人違いの生起確率の関係
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Miura, H., Shimane, D., and Itoh, Y.
2. 発表標題 Person misidentification is associated with cognitive failures and expectations
3. 学会等名 Annual Conference of the European Association of Psychology and Law (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 三浦大志・島根大輔・伊東裕司
2. 発表標題 個人特性および予期に着目した人違い現象の検討
3. 学会等名 日本認知心理学会第16回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Itoh, Y., Shimane, D, & Miura, H.
2. 発表標題 Misidentification of a person as a familiar person and reliability of eyewitness identification
3. 学会等名 38th Australian and New Zealand Association of Psychiatry, Psychology and Law Annual Congress (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

以下のDOIに研究論文のpreprintを公開した。
<https://doi.org/10.31234/osf.io/u8jx4>
<https://doi.org/10.31234/osf.io/2etpm>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	三浦 大志 (Miura Hiroshi) (80726084)	杏林大学・保健学部・講師 (32610)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	島根 大輔 (Shimane Daisuke)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------